

じいちゃんシワあわせ

橋本 真吾

朝起きると、ほくのほつべたが涙でぬれていた。おかしいなあと思いつながら、リビングに行くと、母さんがほくに声をかけてきた。

「しんちゃん、昨日何か夢みてた？」

えっ、夢？ほくは夢なんて見てないけどと言いかけた時、ハッと思い出した。ほくは夢を見ていた。その夢は、見たくない夢だった。

ほくには、大好きなじいちゃんがいる。ほくが小さいころから、ほくの事を可愛がつてくれている、やさしいじいちゃんだ。ほくと母さんがじいちゃんの家に行った時、じいちゃんは、ほくの目の前で倒れてしまった。ほくはその日の事をあまり覚えていない。思い出そうとすると、胸が痛くなって、ピーポーという音だけを思い出してしまう。ほくににとっては思い出したくない事なんだ。

じいちゃんは脳の病気で倒れたと、母さんから聞いた。その時は、じいちゃんがどうなってしまったのか分からなかったし、みんなほくに教えてくれなかった。だから、じいちゃんが遠くに行ってしまったようで、涙が止まらなかった。じいちゃんに会えたのは、病院から退院する日だった。じいちゃんは、車いすに座っていた。じいちゃんがじいちゃんじゃ無くなった気がして、声が出なかった。ほくは近くに行つてそつと手を握つた。じいちゃんの手は、前よりもシワシワで、ほくの手の動きや温かさを感じていないような気がした。ほくのカンは当たっていた。ほくの頭を撫でてくれた手はもう無いんだ。ほく

は思わず下を向いた。じいちゃんは、悲しい顔でずつとほくを見ていた。しばらくすると、じいちゃんがほくに何か話そうとしていた。でも顔の右が動かなくて言葉が分からない。とても驚いて思わず握っていた手を離した。

次の日からほくは自分なりにリハビリについて考えるようになった。右半分が動かないから、毎日動かさなきゃいけない。ほくはじいちゃんと一緒に手と手を重ねてペンやスプーンを持つことにした。じいちゃんの手はシワばかりで、ごわごわしている。ほくは、一生懸命じいちゃんの手や指に力を入れて動かした。そして、最後はいつもマッサージュをする。じいちゃんは少しずつ、ほくの手をにぎり返すようになっていった。

ある日、じいちゃんがほくを呼んだ。ほくは不安になりながら近づいた。じいちゃんはシワシワの手を重ねてほくにおじぎをした。

「シワとシワを合わせるのは、しあわせだ。」

と、ばあちゃんが教えてくれた。ほくににとっては、じいちゃんがしあわせになる事が目標だったんだ。じいちゃん、ありがとう。でもね、じいちゃん、ほくこそじいちゃんとのリハビリを通して、しあわせな気分になれたんだよ。ほくはじいちゃんの手が少しずつ動くようになったのを見ていて、じいちゃんの明るくなった顔や笑った顔もたくさん見れた。ほくはもう泣かないよ。ほくは強くなるんだから。まだリハビリは続くけれど、これから一緒に頑張ろう。じいちゃんありがとう。